主人公総受け物語～時オカ編～

ハイリアの使者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
主人公総受け物語～時オカ編～

【Ｎコード】
Ｎ１１０７Ｕ

【作者名】
ハイリアの使者

【あらすじ】
ただでさえアニポケ編の更新が怪しいのに、『主人公総受け物語』第２作目です（笑）。天の河がポケモンの次に好きなゲームシリーズ『ゼルダの伝説』から、特にお気に入りの『時のオカリナ』を舞台にしております。例のごとく、ゲーム本編の設定を無視したキャラ崩壊の可能性大です。ですが、暖かい目で見ていただければ幸いです。

※１　『ムジュラの仮面』設定を加えるかどうかについては、検討

中。ただ、当分の間は『時のオカリナ』オンリーで。

プロローグ（前書き）

『主人公総受け物語』第2作です。

プロローグ

ここはハイラル。以前、ある勇者が7年の時を渡りながら、世界を魔の手から救った地である。そこではその勇者に思いを寄せる少女たちが物思いに耽っていた。

？「ここハイラルが救われて以来、私はあなたのことが忘れられない・・・・。」

？「あなたと住む世界は違う。でも、幼馴染として・・・ いえ、好きな人としてあなたに伝えたい。」

？「わらわのフィアンセよ。そなたは今でもわらわのことを覚えておるのであろうか・・・・。」

？「妖精君。あなたの素敵なオカリナの音色を聴いて以来、あなたのことが忘れられないの。」

少女達は、ある人物の名を口に出す。

？「「「「リンク・・・・。」」」」

ここから、一人の勇者を巡る波乱含みの物語が今始まるのであった・・・

プロローグ（後書き）

本日、『ゼルダの伝説　時のオカリナ　３Ｄ』が発売されます。

※　詳しくは、活動報告を参照。

勇者の朝（前書き）

久々更新ですみません（汗）

勇者の朝

ここはコキリの森。姿がずっと子供のままという不思議な部族・コキリ族が住む森である。この森の近くにある迷いの森に迷い込んだコキリ族以外の者は、子供ならスタルキッド、大人ならスタルフォスというモンスターになると昔から言われている。ただ一人を除いては・・・

?「ん、んん。あっ、もう朝か・・・。」

この少年の名はリンク。かつて、ハイラル、タルミナと2つの世界の危機を救った勇者である。彼はコキリ族ではなくハイラル人であるが、迷いの森に迷い込んでも（間違ってもそんなことはないと思うが・・・）スタルキッドにはならないという不思議な少年である。

リンク「そろそろ、起きなきゃ。ん?」

リンクは起きた早々、隣に感じる違和感を感じた。

リンク「・・・。サリア、またかよ。」

そこにはリンクの幼馴染であり、7賢者のうちの森の賢者であるサリアが眠っていた。リンクの言葉から類推すると、リンクの寝床に潜り込んで眠っていたのは1度や2度ではないようだ。

リンク「サリア、起きてよ。」

リンクはサリアを優しく起こす。

サリア「ん～、あっ、リンクおはよう。」

サリアは寝ぼけ眼でリンクにおはようの挨拶をする。

リンク「ねぇ、思ったけどなんでいつも俺の家で寝てるの？」

リンクは当然の質問をサリアにぶつける。

サリア「それはね、リンクと一緒だとさみしくないから。もしかして、嫌だった？」

サリアはリンクを涙目＋上目遣いでリンクを見つめる。

リンク「あっ、いや。別に嫌じゃないけど。」

リンクはサリアが泣きそうな顔だったので、慌てて言う。

サリア「じゃあ、今日も来ていい？」

サリアは急に涙を引っ込めて、リンクに言う。

リンク「（嘘泣きかよ．．．。）はぁ～、好きにして。」

サリア「ホントに！？　やったぁ、リンクだ～い好き。」

サリアはパァァと笑顔を咲かせると、リンクに抱き着き頬に触れるだけのキスをした。

リンク「ハハハ．．．。」

リンクは苦笑を浮かべた。

サリア「確か今日はみんなで集まって朝ごはんを食べる日だったよね。アタシ、先に行ってるからリンクも早く出てきてね。」

サリアはリンクにウィンクしてリンク宅を後にした。ちなみに言っておくが、サリアはリンクに対して好意を抱いている。だが、対してリンクは鈍感なため、未だサリアの気持ちに気づいていない。これもちなみに言っておくが、リンクに対して好意を抱いているのは、サリアだけではない。それにはハイラル国の姫君だとか、平原の牧場の一人娘だとか、魚人族の姫君だとか・・・ 他多数がいる。さて、このリンクをめぐる波乱はこの先どうなることやら・・・

続いて後書きショー

勇者の朝（後書き）

時オカの始めと言ったら、リンサリでしょ！←ドヤ顔。

時オカのはじめは・・・（前書き）

やっぱり、リンサリだと思う作者・・・

時オカのはじめは・・・

夜中に忍び込んだサリアとともに起床したリンクは、他のコキリ族とともに朝食を摂るため、集まっていた。のだが・・・

サリア「はい、リンク。あ～ん。」

朝食を食べ始めて5秒もたたないうちに、サリアがリンクに食べさせる行為いわゆる「あ～ん」を試みている。

リング「いいよ、サリア。自分で食べられるから。」

リンクは周りの視線と恥ずかしさから、断ろうとする。だが、

サリア「・・・グスッ。リンク、ワタシの持ってきたの食べてくれないんだ・・・。」

サリアが今にも泣きそうな顔でリンクを見つめる。

リンク「あっ、いやだって・・・。」

リンクは頑なに断ろうとするが、

リンク「はぁ、分かったよ。サリア・・・。」

結局、リンクは折れてしまった。

サリア「ホントに！　じゃあ、早速・・・。」

リンク（嘘泣きかよ・・・。俺って、どうしてこう女の子の泣きそうな姿に弱いんだろうか・・・。）

自分の性格を悔やんだ時の勇者の姿がここにはあった。リンクはサリアからなんども「アーン」で食べさせてもらう羽目になり、その光景に女子達はハラハラドキドキ、男子達は見慣れた光景に呆れた表情を浮かべた。

ミド（サリア・・・。もうここまでされると逆に引くわぁ・・・。）

サリアのリンクに対する執拗なスキンシップにドン引きするコキリ族の長・ミドだった。

ミド「それはそうと、リンク。お前の妖精は見つかったのか？」

ミドはハイラルの危機を救って以来行方知れずのリンクの妖精・ナビィについて、リンク本人に聞いてみた。

リンク「ううん、まだ見つからないんだ。ハイラルの他にタルミナも探してみたけれど、結局見つからなかったよ。」

ミド「そっか。まぁ、俺達に何かできることがあれば協力するからさ。」

リンク「ありがとう、ミド。でも、これじゃあまた『妖精なし』に逆戻りだね、アハハハハ。」

リンクは笑いながらそう言った。

ミド・サリア（（リンク・・・。））

ミドとサリア、否その場にいた全員にはそれがリンクのごまかしだと言うことに気が付く。その証拠にリンクは笑ってはいるが、顔が少々引き攣っている。

リンク「アハハハハ、ハハ、ハァ・・・。」

リンクもごまかすのに限界が来たのか、落ち込んでしまった。そして、その場は重苦しい雰囲気に包まれる。一応食事も一通り済ませた後だったので、この重苦しい雰囲気の中、一同は解散した。だが、リンクはまだ落ち込んでいる。

サリア「リンク・・・。」

サリアはリンクのことを心配して、自宅から隣にあるリンクの家をじーっと見つめる。

サリア「ここはワタシが何とかしなきゃネ。」

サリアは意を決して、お節介だとは思いつつリンクの家へと向かった。果たして、リンクはこの重々しい気分から脱して、いつもの元気な姿を取り戻すことが出来るのか・・・

続く・・・

時オカのはじめは・・・（後書き）

リンクの落ち込み様に、サリアはどうするのか！？

サリアの励まし（前書き）

落ち込むリンクをサリアが必死に励ます話です。

かなり短いです。

サリアの励まし

サリア「リンク？」

サリアは恐る恐るリンクの家の中へと入っていった。

リンク「あっ、サリア・・・。」

サリアに気付いたリンクは、返事をする。だが、その返事にはどことなく元気がなかった。

サリア「リンク、やっぱり・・・。」

リンク「朝食の時はなんとかごまかせたけど、みんなが心配してくれるうちに悲しくなってくるんだ。ごめん、俺のせいでせっかくの楽しい食事を変な雰囲気にしちゃって・・・。」

さらに落ち込んでしまったリンク。そんな様子にサリアは、

サリア「リンク。一人で抱え込んじゃダメ！」

リンク「えっ！？」

突然真剣な表情で話すサリアにキョトンとするリンク。

サリア「サリア、リンクが一人で悩んでる姿なんて見たくない！確かにワタシ達は違う種族だけど、これまで一緒に過ごしてきた仲じゃない！」

リンク「・・・・・・。」

サリアの真剣さに無言のままのリンク。

サリア「ワタシだって、森の賢者として時の勇者を支える使命がある。それに、ワタシだけが楽しく過ごしてて、リンク1人が楽しくないだなんて、そんなの嫌だヨ・・・。」

サリアの目に光るものが少しずつ流れ落ちていた。

リンク「ごめん、サリア。」

それを見たリンクはサリアを慰めるように抱きしめた。

リンク「確かにサリアの言うとおりだ。俺は一人ぼっちなんかじゃないのに、ずっと一人で抱え込んでいた。バカだな、俺。」

リンクはサリアに謝るように言う。

サリア「気にしなくていいヨ。今のワタシだって、感情的になってしまったんだから。冷静に考えたら、誰だって信じる仲間がいなくなったら悲しいもんね。」

サリアもだいぶ落ち着いたようだ。

リンク「俺、決めた。ナビィを探すよ。早速だけど、今から森の聖域にいこうかと思うんだけど、サリアも付いてきてくれる？」

サリア「もっちろんヨ。リンクの為なら、余力を惜しまず協力するわ。」

リンク「ありがとう、サリア。」

リンクはナビィを探す決心をした。そして、すぐにサリアとともに先ずは森の聖域に行ったのだった。

続いて後書きショー

サリアの励まし（後書き）

次回、ナビィの手がかりを探しに森の聖域へ・・・

森の聖域での異変・・・（前書き）

森の聖域に到着したリンク、サリアだが、いきなりの大ピンチ！

そして、遅れることゼル伝シリーズを語る上で欠かせないあのお姫様も！？

森の聖域での異変・・・

リンクとサリアはナビィの手がかりを見つける為、森の聖域へ向かうことにした。その道中の迷いの森にて、

リンク「そういえば、サリア。俺はいろんな武器持ってるけど、サリアは大丈夫？」

リンクはサリアが敵に襲われた時のことを心配した。少ない敵に襲われた時ならサリアを庇うことが出来るが、襲う敵の数が多ければ庇いきれない。

サリア「それなら、心配無用ヨ。スタルキッドから吹き矢貰ってきたから。ワタシ、こう見えても吹き矢の腕前には自信があるわ。」

リンク「そう、それはよかった。」

サリアがスタルキッドから貰った吹き矢があると自信気に応えたので、リンクは安心した。

リンク（そういえば、俺が7年後ここに来たときはアイツらに吹き矢で攻撃されたよな・・・。）

リンクは時の力により青年の姿になったとき、迷いの森での出来事を思い出す。ちなみに、知ってる方もいると思うが、『時オカ』にて大人時代の迷いの森のスタルキッドは、敵モンスター扱いになる。

リンク「ようやく着いたね。」

サリア「うん、早速この先に行きましょう。」

スタルキッド達の助けもあり、森の聖域の入り口まで来たリンクとサリアは、その入り口をくぐり、森の聖域へと到着した。

サリア「リンク、ここからどうする？」

リンク「とりあえず、最奥（さいおう）部まで行ってみよう。」

リンクとサリアは、森の神殿の入り口がある最奥（さいおう）部まで行ってみることにした。するとその時だった。

ウォォォォォォォォン！

リンク・サリア「「な、何！？」」

突然、狼の鳴き声がしたので、驚きを見せるリンクとサリア。時オカをやっている読者なら、この後何が出てくるのかはお分かりであろう。

リンク「ウルフォスだ！」

サリア「しかも、凄い数よ！？」

無数のウルフォスがリンクとサリアの目の前に現れた。そして、何体かがリンクとサリアに襲い掛かってきた。

リンク「うわぁ！？」

サリア「きゃあ！？」

リンクとサリアは辛うじて避けた。

サリア「リンク、大丈夫！？」

リンク「こっちは、平気。サリアは？」

サリア「ワタシも、大丈夫よ。」

リンクは剣を、サリアは吹き矢を咄嗟に構え、臨戦態勢に入った。そして、ウルフォス軍団に応戦し、何体か倒した。

リンク「ハァ、ハァ、何とか数を減らしたけれど・・・。」

サリア「ハァ、ハァ、でもこの数多すぎるわ・・・。」

2人とも息を切らすほど疲れが蓄積していく。すると、一匹のウルフォスがサリアに襲い掛かって来た。

リンク「サリア、危ない！」

サリア「えっ、キャア！？」

サリアは咄嗟にウルフォスを避けた。だが、ウルフォスはまだサリアを狙っている。そして、再びサリアに飛び掛かる。

サリア（もうダメ・・・。）

サリアは思わず目を瞑ってしまう。だが、サリアは痛みを感じなかった。再び目を開けると、

サリア「リ、リンク！？」

リンク「だ、大丈夫かい？　サリア？」

なんとリンクがサリアを庇ってウルファスの攻撃を受け止めていたのだ。リンクは片腕を噛み付かれ、かなりの出血も見られる。

リンク「てぃやぁ！」

リンクは噛み付かれた腕をそのまま大きく振り、ウルフォスを投げ飛ばした。

リンク「こうなったら！」

リンクはサリアを安全なところに移動させると、力を振り絞って剣で大回転切りでウルフォス達を攻撃した。ウルフォス達はその凄まじい攻撃に怖気ついて、逃げ去っていった。

サリア「リンク！」

サリアはリンクに近づき声を掛ける。

リンク「くっ・・・。」

サリアはすぐに先程噛み付かれて出血しているリンクの腕の手当てをした。その甲斐もあって、しばらくして、出血も完全にではないがだいぶおさまった。

サリア「リンク、もう少し休む？」

リンク「ありがとう、でももう大丈夫。痛みもだいぶ治まったから。」

サリア「そう、それはよかったわ。」

リンクの笑顔を見て、サリアはホッと一安心した。

リンク「ここで立ち止まってはいられないよ。さぁ、行こうか。」

サリア「えぇ。」

リンクとサリアは再び森の聖域の最奥部(さいおうぶ)に向けて歩き出した。そして森の聖域の迷路を抜け、ようやく最奥部(さいおうぶ)へと到着した。

サリア「ねぇ、リンク。あそこに誰かいるよ。」

リンク「ん？　あれはシーク？」

最奥部(さいおうぶ)に到着すると、そこには1人の人物が立っていた。その人物とはゼルダ姫・・・もといシークだった。

※　この作品では、子ゼルダでもシークに変身するという設定です。

シーク「ん？　リンク、君も来たんだな。」

シークもリンクに気づき、声を掛ける。

リンク「シークもここに来たってことは、森の聖域に何かあるんだね。」

シーク「あぁ、僕は強力な邪気を感じた。それを辿っているうちにこの森の聖域へと来た。そしてその邪気は森の神殿から発せられているようだ。この森の神殿が邪気の本源だろう。」

シークは淡々と答える。

シーク「ん？　リンク、その腕の訪台はどうしたんだい？」

シークはリンクの腕に巻かれた包帯に気づく。

リンク「あぁ、これはさっきウルフォスの群れにやられてできた傷なんだ。」

リンクは先程ウルフォスに襲われて先頭になったことをシークに話す。

シーク「そうか、それは大変だったな。僕がもっと早く駆けつけていればこんなことにはならなかったのに・・・。」

シークはリンクのもとに早く駆けつけられなかったことを後悔す

る。

リンク「気にしないでよ。今はなんともないんだしさ。」

サリア「それにリンクが噛み付かれたのは、ワタシのせいだし・・・。」

リンクに続き、サリアもシークをフォローする。そんな時だった。

リンク「うっ！？」

シーク・サリア「「リンク！？」」

リンクが突然息を詰まらせるようにしてその場に座り込んだ。

サリア「リンク、やっぱりまだ痛むんじゃ・・・。」

リンク「平気だって・・・。」

シーク「全然大丈夫じゃない！　傷口が開いているぞ。」

リンクの腕に巻かれていた包帯は、血で真っ赤に染まっていた。サリアとシークは手分けして、リンクの腕の手当てに取り掛かる。幸いシークが薬を持っていたので、止血後、血をふき取ってからそれを塗り、包帯を取り換えた。

リンク「ありがとう、サリア・・・。」

サリア「これくらいお安い御用ヨ。」

礼を言うリンクにサリアはウインクしながら答えた。

リンク「それと、ゼルダも・・・。」

シーク「なんてことないさ。僕がたまたま薬を持っていたから手当てがはかどったんだ。それはそうと、リンク。僕はハイラルの姫君じゃないんだよ・・・。」

リンク「あっ。」

リンクはシークにも礼を言ったが、その際、シークではなく、ゼルダと呼んでしまったことに気が付く。再三言うが、シークの正体はハイラル王国の姫君・ゼルダである。

サリア（えっ！？　この人がハイラルのお姫様！？）

サリアが驚くのも無理なかった。今目の前にいるシークの容姿は、体中の筋肉が発達途中の少年だ。とても、一国の姫君とは想像もつかない。

サリア（それなら、確かめてみようか・・・。）

サリアはふと閃き、シークの正体がゼルダ姫なのか確かめてみようとした。ちなみに、どのような経緯で知ったのかは定かではないが、サリアはゼルダ姫がリンクに好意を抱いていることを知っている。

サリア「ねぇ、リンク。ここで少し休まない？」

リンク「え、あっ、別にいいけど・・・。サリア、どうして顔をそ

んなに近づけるんだい？」

リンクは少々戸惑っていた。サリアとリンクの顔の距離は唇が触れるか触れないかまでに迫っている。さらに言えば、サリアの腕がリンクの怪我していない方の腕に絡まっている。

サリア「特に意味はないわ。もしかして、嫌だった？」

サリアは首を傾げながら、上目づかいでリンクに顔を向ける。ロリ好きの男ならここで一発ＫＯだろう。

リンク「別に嫌じゃないけど．．．。」

リンクは冷や汗を垂らしながら答える。その時だった。

サリア「！？」

急にサリアがリンクから離れ（というか、離され）、リンクの目の前にはシークの変装を解いたゼルダが現れた。

リンク「ぜ、ゼルダ！？」

ゼルダ「お久しぶりです。リンク。」

ゼルダは正座で手を合わせながら、リンクに笑顔を向ける。

リンク（い、いつの間に変装を解いたんだ（汗））

リンクは恐るべきスピードでゼルダが変装を解いたことに驚く。

サリア「ちょっと、何すんのよ！」

サリアは先程リンクから引き剥がされたことに怒りを露わにする。

ゼルダ「あら、あなたは森の賢者様。幼馴染だからと言って、少々リンクに慣れ慣れし過ぎではございませんか？」

ゼルダは丁寧口調で答えるが、その一言一言には多少凄みのようなものが含まれている。さらに、彼女からは黒いオーラが出ている気がしなくもなかった。

サリア「別にいいでしょ。リンクのことを一番知ってるのはワタシダヨ。」

ここで、サリアとゼルダによるにらみ合いが始まる。

リンク「・・・・・・。」

2人の少女による睨みあいをただ茫然と見つめるしかない時の勇者。普通ならここで止めに入るのだが・・・

リンク（何だろう。止めたらスゲくヤバイ目に遭いそうな気が・・・。）

数々の危険を乗り越えてきた経験からか、そのようなことを察知する。サリアとゼルダの睨みあいは2人がお互いに疲れ果てるまで続いた。このようなことで、森の神殿へ邪悪な気の真相を確かめることが出来るのだろうか・・・

続いて後書きショー

森の聖域での異変・・・（後書き）

ゼルダとサリアによるリンク争奪戦勃発！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1107u/

主人公総受け物語～時オカ編～

2011年12月13日07時49分発行